充たされざる者

The Unconsoled

Kazuo Ishiguro

上

カズオ・イシグロ

古賀林幸＝訳

充たされざる者

The Unconsoled

Kazuo Ishiguro

上

カズオ・イシグロ

古賀林幸 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

THE UNCONSOLED by Kazuo Ishiguro
Copyright © 1995 by Kazuo Ishiguro
Japanese translation rights arranged with Rogers, Coleridge and White Ltd.
through The English Agency (Japan) Ltd.
Japanese edition © 1997 by Chuokoron-Sha, Inc.

充(み)たされざる者(もの) 上

1997年6月30日　初版印刷
1997年7月10日　初版発行

著　者　カズオ・イシグロ
訳　者　古賀林幸(こがばやしさち)
発行者　笠松　巌
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売部 03-3563-1431
編集部 03-3563-3666
振替　00120-4-34

本文印刷　三晃印刷
カバー・扉印刷　大熊整美堂
製本　小泉製本

Printed in Japan ©1997 CHUOKORON-SHA, Inc.
ISBN 4-12-002704-X C0097

・定価はカバーに表示してあります。
・落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

2200円

充たされざる者

ローナとナオミへ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

充たされざる者　上

I

1

タクシーの運転手は、わたしを出迎える者が誰もいないのでとまどったようだった。フロントデスクの向こうにさえ、一人のホテルマンもいない。運転手は人気のないロビーをあちこち見て回った。おそらく観葉植物の鉢かひじかけ椅子の陰にでも、ホテルの人間がいないかと思ったのだろう。結局、彼はわたしのスーツケースをエレベーターのドアの前に置くと、何か言いわけめいたことをつぶやきながら、いとまごいをして立ち去った。

ロビーはかなり広々としていて、まわりにはコーヒー・テーブルがゆったりとした間隔で置いてある。しかし天井は低く、はっきりと垂れ下がった部分があるので、少しばかり閉所恐怖症になりそうな雰囲気だ。外は晴天だというのに、ホテルのなかは薄暗かった。フロントデスクのそばの壁に一筋だけ明るい光が差しこみ、黒っぽい羽目板と、ドイツ語、フランス語、英語の雑誌をのせた棚のあたりを照らしている。フロントデスクの上に小さな銀の鈴があったので、歩み寄ってちょうどそれを振ろうとしたとき、わたしのどこか後方にあったドアが開いて、制服姿の若い男が現れた。「いらっしゃいませ」と、男は気乗りしない様子で挨拶をすると、フロントデスクの向こうに回っ

てチェックインの手続きを始めた。席をはずしていたことにもごもごと詫びは言ったものの、応対ぶりはまだしばらくぞんざいだった。しかしわたしが名前を告げるや、はっとして居ずまいを正した。

「ライダーさま。これはこれは気がつきませんで、たいへん失礼をいたしました。ホフマンが……手前どもの支配人ですが、ぜひじきじきにお出迎えしたいと申しておりましたのですが、あいにくとただいま重要な会議に出ておりますもので」

「そんなことはまったくかまわない。あとでお目にかかるのを楽しみにしているよ」

フロントマンはチェックインの書類を手早く処理しながら、支配人がわたしを直接出迎えられなかったことをどんなにか悔しがるでしょうと、ずっとつぶやきつづけていた。彼は二度ほど、支配人は〈木曜の夕べ〉の準備でいつになく大きな重圧を受けていて、ホテルにいる時間が普段よりずっと少ないのですと説明した。わたしは〈木曜の夕べ〉がどんなものなのか詳しく尋ねるだけの気力もなく、ただうなずいた。

「ああ、それはそうと、ブロッキーさまはきょう、すばらしくおやりになっています」と、フロントマンは顔を輝かせて言った。「実にすばらしく。けさは四時間ぶっつづけで、あのオーケストラとリハーサルをなさいました。ほら、いまもお聴きになってください！　まだ懸命に取り組んでおられますでしょう。ご自分で納得がいかれるまで」

彼はロビーの奥のほうを指さした。そのとき初めて、わたしはこの建物のどこからかピアノの音が響いてくるのに気づいた。外を行き交う車のくぐもった騒音にまじって、かろうじて聴き取れるほどの大きさだ。わたしは顔を上げて、耳をそばだてた。誰かが同じ短いフレーズ――ミュラリー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の《垂直性》の第二楽章の一節――を、何度も何度も繰り返し、ゆっくりと、没頭して弾いている。「もちろん、支配人がおりましたら」と、フロントマンは言った。「きっとブロツキーさまをこちらにお連れしてお引き合わせするところでしょうが、わたくしなどが……」そこで彼は笑い声を上げた。「わたくしなどがお声をかけてよいものかどうか。何しろ、もしも心底から没頭していらっしゃるなら……」

「もちろん、もちろん。それはまた別の機会に」

「支配人さえおりましたら……」と、彼は語尾をにごしてまた笑った。それから身を乗りだすと、声をひそめてこう言った。「実を申しますと、お客さまのなかには、こともあろうに何とご不満を訴えてくる方がございましてね。今回のようにブロツキーさまがピアノをお弾きになるたびに、談話室を貸し切りにすることに。まったくもって、何をお考えになっているのか！　実はきのうも、おふたかたがそれぞれホフマンに苦情を持ちこまれましてね。でもご安心ください。ですぎたお客さまにはただちにお引き取りを願いました」

「そうでしょうとも。ところで、ブロツキーさんと？」わたしはその名前について考えてみたが、何も頭に浮かんでこなかった。それからフロントマンがけげんな表情で見ていることに気づき、あわててこう言い添えた。「ええ、ええ。またそのうちに、ブロツキーさんにお目にかかるのを楽しみにしているよ」

「支配人さえおりましたら」

「お気づかいは無用。さて、これで手続きがすんだのなら、部屋に案内していただきたいんだが……」

「もちろんです。長旅のあとですから、さぞやお疲れのことでしょう。キーはこちらでございます。そこにおりますグスタフが、お部屋までご案内いたします」

後ろを振り返ると、年配のポーターがロビーの端で待機していた。ドアの開いたエレベーターの前に立ち、何か考えごとにふけっている様子で、なかをぼうっと見つめている。わたしが歩み寄ると、彼は驚いてぴくりとした。それからわたしのスーツケースを取り上げ、あとから急いでエレベーターに入ってきた。

エレベーターが昇りはじめてからも、老ポーターはずっと二個のスーツケースを持ったままで、力んでいるせいか顔が真っ赤になってきた。スーツケースは二つともとても重かったので、わたしは彼が目の前で気絶するのではないかと心配になって言った。

「ねえきみ、それを置いたほうがいいんじゃないか」

「お心づかい、ありがとうございます」とポーターは答えたが、意外なことにその声には、彼が懸命に踏ん張っている気配はみじんも感じられなかった。「もう何十年も昔のことになりますが、初めてこの職業に就きましたときには、いつもスーツケースを床に置いておりました。どうしても持たなければならないときにだけ、そうしておりましたのです。つまり、移動しているときにだけ。実を申しますと、こちらで働くようになって十五年は、そのような方法を取っておりました。この町の後輩のポーターの多くは、まだそのようにしております。しかしわたくしは、いまそのたぐいのことは決していたしません。それに、さほどの距離ではございませんから」

わたしたちはしばらく黙ってエレベーターに乗っていた。それから、わたしが口を開いた。

「ではこのホテルで働くようになって、長いんだね」
「もう二十七年でございます。その間にいろんなことを見てまいりました。でも、もちろん、ホテルのほうはわたくしがまいりますずっと以前からございます。十八世紀には、フレデリック大王が一夜の宿を取ったと言われておりますし、当時でさえ、すでに建ってから久しいホテルでございました。ええ、さようですとも。ここでは創立以来、歴史に残る重要な出来事がいろいろと起こっております。お客さまがまたいつかお疲れでないときに、喜んでそんな話をお聞かせいたしましょう」
「ところで、きみがさっき言ったように、なぜ荷物を床に置くのはまずいと思っているんだね？」
「はあ、さよう」と、ポーターは答えた。「そこが興味深い点なのです。ご想像がつくでしょうが、このような町にはホテルがいくつもございましてね。つまりこの町のおおぜいの市民は、何かのおりに一度はポーターをやろうとしたことがあるわけです。ところがここの住人の多くは、どうやら制服を着さえすれば、それだけでポーターの仕事ができると考えているらしい。それが、とりわけこの町に広まってしまった誤解なのです。地元の神話とでも呼べばよろしいでしょうか。そのうえ正直なところ、わたくしもただ無分別に、そう考えていた時期がございました。それからあるとき——と申しましても、もう何年も前のことになるのですが——家内と一緒に短い休暇旅行に出かけたのです。スイスのルツェルンへ。家内はもう亡くなりましたが、あれのことを考えるときには必ずあの短い休暇のことを思い出します。湖畔の、とても美しいところでございます。いや、お客さまならきっとご存じでしょうな。朝食のあと、二人して楽しくボートに乗りました。さて、先ほどの話に戻りますと、その休暇のときに、わたくしはあの町の住人のポーターに対する考えが、この

町とは違っていることに気づきました。何と申しましょうか、あちらでは、ポーターにずっと高い敬意が払われていたのです。なかでも優秀なポーターはちょっとした有名人でして、トップクラスのホテルから引く手あまた、争奪戦の対象でございました。わたくしは目からうろこが落ちる思いだったと、申しあげねばなりません。ところがこの町では、さよう、もう長いあいだ、先に申したような考えが支配的でございます。実際、はたしてそれがなくなる時代が来るのかと思われるほどでして。いえ、この町の者がポーターに失礼な態度を取ると言っているわけではございません。それどころか、わたくしはいつも丁重な、配慮ある扱いを受けております。それでもでございますよ、お客さま。誰でも思いたったときに、やろうとさえ思えばこの仕事ができるという考えが、ここにはつねにございます。それはたぶん、この町の誰もが何かのおりに、ある場所から別の場所へ荷物を運んだことがあるからでしょう。一度は経験があるものですから、ホテルのポーターになるのはその延長にすぎないと、考えているのです。わたくしは長年のあいだに、まさにこのエレベーターのなかで、こうおっしゃる方がたと何人も出合いました。『わたしもいつかいまの仕事を辞めて、ポーターをやるかもしれないね』と。それから、ある日――あのルツェルンでの短い休暇から少したったころでしたが――有力な市会議員のお一人が、まあだいたい、こんな意味のことを口にされました。『いつかわたしもそれをやりたいものだ』と、その方はスーツケースを指さしながらおっしゃるのです。『わたしの理想の人生だよ。世間の気苦労などに、ひとつもわずらわされない！』と。たぶんわたくしに気をつかって、そう言ってくださったのでしょう。きっとわたくしがうらやましい存在だと、おっしゃりたかったのです。そのときわたくしは、いまよりずっと若かったのでございますが、スーツケースを持たずに、まさにこのエレベーターの床に置いておりました。それ

に当時のわたくしは、少しばかりそんなふうに見えたのかもしれません。ええ、あの方のお言葉どおり、気苦労ひとつないような人間に。しかし間違いなく、あれはわたくしにとって最後のひと押しでした。いえ、その方のおっしゃったことに腹を立てたわけではございません。でもそう告げられたときに、それまでしばらく考えておりましたことにはたと合点がいく気がしたのです。先ほど申しあげたように、わたくしはルツェルンへの小旅行から目を開かれて帰ってきたばかりでした。それでわたくしは、そうだ、この町のポーターたちもそろそろいまのような姿勢を改めるときではなかろうかと考えました。何しろルツェルンでまったく違ったありさまを目のあたりにして、さよう、この町の現状では不満足だと感じておりましたものですから、そのことを真剣に考えまして、自ら実行しようと思ういくつかの変更を決意したのです。もちろんあのときでさえ、それがどれほど困難なものになるか、自分でもほぼ分かってはおりました。もう何年も前のことですが、それでもわたくしの世代にとってはすでに手遅れだと、認識していたように思います。万事は手のほどこしようがないほどでしたから。ですけれど、たとえ自分が努力した結果ごくわずかしか事情が変わらないとしても、少なくともあとに続く者たちに道を開くことになるのではないかと考えました。それであの市会議員のお言葉を聞いた日以来、自分なりのやり方を実行に移し、それを守ってきたわけでございます。そしてうれしいことに、この町のほかのポーターのなかにも、わたくしについてくる者が出てまいりましてね。と申しましても、まったく同じやり方を採用したというわけではありません。しかし彼らのやり方も、まあ、わたくしの意に沿うものでございました」

「なるほど。そのやり方の一つが、スーツケースを床に置かずに、ずっと持っているということなんだね」

「さようでございます。よくぞご理解くださいました。もちろん、ここで申しあげておかなければなりませんが、わたくしが自らこうした決まりをつくりましたときには、ずっと若くて体力もございましたし、年とともに体力が弱っていくことなど考えにも入れなかったのでしょう。おかしな話でしょうが、そんなものなのです。ほかのポーターたちも、同じことを口にしてきました。それでも全員が、以前に自分たちが決めたことを守ろうと努めております。長年のあいだに、わたくしども十二人は、かなり親しい仲間になりました。これまでずっと事態を改善しようとしてきた者たちの、残党でございます。いまになってわたくしが何かを撤回したりすれば、ほかの者をがっかりさせてしまうでしょうし、仲間の誰かが古くからの決まりのどれかを破れば、わたくしも同じように感じるでしょう。この町でなにがしかの進歩がみられたことに、疑いはございませんから。たしかに、まだまだ改善すべき点はございます。しかしわたくしどもは、そうしたことについてたびたび話し合ってきたのです――毎週日曜の午後に、旧市街のハンガリアン・カフェで集まりを持っておりますから、よろしければお顔を見せてください。大歓迎でございますよ――それはともかく、こうした問題についてよく話し合った結果、いまやこの町でのポーターに対する接し方がかなり改善したという点では、まぎれもなく全員の意見が一致するところでございます。あとからポーターになった若手は、もちろんそれを当然のことと考えております。しかしわたくしどもハンガリアン・カフェのグループは、たとえささやかであれ、自分たちがこの変化をもたらしたのだと自負しているのです。ほんとうに、ぜひお顔を見せてください。喜んで仲間たちにご紹介いたしましょう。昔と違ってまったく堅苦しい会ではございませんし、かなり以前から、特別な事情があるときはゲストを連れてきてもよいことになっております。それに午後に柔らかな日差しがあるいまの季節は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com